

平成 26 年度メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業

## 収蔵施設における資料保存・整理のケーススタディ

平成 27 年 3 月

## 目次

第1章	はじめに	3
1.1.	本プロジェクトの背景と目的	3
1.2.	プロジェクトの概要	3
1.2.1.	方法	3
1.2.2.	実施体制および報告書執筆について	5
1.3.	本報告書の構成	5
第2章	北九州市漫画ミュージアム／京都国際マンガミュージアムから熊本倉庫への資料移管	7
2.1.	北九州市漫画ミュージアム	7
2.1.1.	実施前の状況	7
2.1.2.	実施内容	8
2.2.	京都国際マンガミュージアム	9
2.2.1.	実施前の状況	9
2.2.2.	実施内容	9
第3章	熊本倉庫における書誌データ入力	10
3.1.	熊本マンガミュージアムプロジェクト・熊本倉庫の整備について	10
3.2.	書誌データ入力のためのシステム上の整備	10
3.3.	書誌データ入力	11
3.4.	資料の保管	14
3.4.1.	箱移動と倉庫内作業について	14
3.4.2.	作業スペースから倉庫への箱移動	14
3.4.3.	倉庫内区画整理・箱配置と今後の課題	16
3.5.	遠隔による作業管理について	16
第4章	熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告	19
4.1.	作業処理件数の統計	19
4.1.1.	作業処理件数の統計	19

## 目次

4.1.2.	データ入力作業時間／その他作業時間の割合 .....	22
4.1.3.	時間当たり処理件数 .....	23
4.1.4.	資料の内容別の処理時間 .....	23
4.1.5.	ISBN 類別 (A/B/C) データ統計 .....	27
4.1.6.	入力データ類別 (①/②/③) データ統計 .....	29
4.1.7.	ISBN 類別と入力データ類別の組み合わせ処理時間 .....	30
第 5 章	成果と今後の課題 .....	31
5.1.	成果 .....	31
5.2.	今後の課題 .....	31
5.2.1.	データ入力に伴う問題点 .....	31
5.2.2.	<活用>システム構築のための課題 .....	32
5.2.3.	予算に関する課題 .....	32
5.3.	おわりに .....	33

### 第1章 はじめに

#### 1.1. 本プロジェクトの背景と目的

2000年代以降、学術的なマンガ研究の発展に伴い、研究環境の整備及び制度化が重要な課題となっている。特に一次資料としてのマンガ本（マンガ雑誌、マンガ単行本等）のアーカイブはマンガ研究のベースとなる作業だが、その資料の膨大さとメディアとしての多様性は、各収蔵施設が抱える共通の問題である。

これをふまえ、本プロジェクトでは、膨大なマンガ資料を、どこか一ヶ所に集めるのではなく、全国に点在する収蔵施設をネットワークで繋ぎ、資料の現物と情報の相互利用を促進するという、（メディア芸術領域に関わる）「ナショナル・アーカイブ<sup>1</sup>」構築の足掛かりを作ることを目的とする。つまり「それぞれの所蔵館で何をどのようにアーカイブするか」と「オールジャパン<sup>2</sup>でアーカイブを進める可能性と課題とは何か」を双方向的に意識し、資料現物の移動や管理、データベースの構築や共有など、資料保存・整理が抱える現時点での諸課題に試験的に取り組むとともに、近い将来取り組むべき問題点を浮き彫りにすることを目指すものである。

#### 1.2. プロジェクトの概要

##### 1.2.1. 方法

今回、ケーススタディの対象としたのは、マンガ本の収蔵施設として実績を持つ「京都国際マンガミュージアム」（約30万点所蔵。以下京都MM）と「北九州市漫画ミュージアム」（約7万点所蔵。以下北九州MM）、そして、熊本県熊本市内にあるマンガの巨大倉庫（以下熊本倉庫）を準備しているNPO「熊本マンガミュージアムプロジェクト」（以下クママン）である。プロジェクトを遂行するために、まずは、それぞれの組織の、資料所蔵に関わるスタッフでワーキンググループを結成した。

（ア）まずは、中心的なモデル施設として想定されている京都MMの図書管理部門のスタッフによる会議を、平成26年8月9日、京都MMにて実施、3組織間でのマンガ資料とデータの共有と移動の方法について具体的なシミュレーションを行い、作業パターンを抽出した。

（イ）上記会議で抽出したパターンに基づき、平成26年10月20日、3組織の代表が京都MMに集まり、その実現可能性や実務作業を始めるためのスケジュールや人員設置、必要経費などについて、シミュレーションした。同時に、マンガ関連資料の

---

<sup>1</sup>本報告書においては、前段にも記載されている、膨大なマンガ資料を、どこか一ヶ所に集めるのではなく、全国に点在する収蔵施設をネットワークで繋ぎ、資料の現物と情報の相互利用を促進するという構想を意味する。

<sup>2</sup>全国に点在する収蔵施設の連携

## 第1章 はじめに

アーカイブ実績を持ち寄り、さらに大規模な資料移管を経験している「大阪府立国際児童文学館」のスタッフを招いた勉強会を行い、ケーススタディをより生産的に進めるためのアドバイスをもらった。

- (ウ) さらに、12月4日・5日にかけて、資料の移管が予定されている熊本倉庫の視察を実施し、環境調査と同時に、作業上必要な設備等の抽出を行った。
- (エ) 上記2度の会議及び視察を経て、京都MM及び北九州MMから熊本倉庫へ資料を輸送、受け入れた資料の書誌データを作成した。書誌データの作成にあたっては今後他のデータベースとの連携をスムーズにするために、「文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業」の一環として作成中のデータベース（以下メディア芸術データベース<sup>3</sup>）のフォーマットを採用した。そして、これら一連の過程にどれだけのマンパワーと費用がかかるか、また、資料の郵送や受入に際して、どのような条件を必要とするかなどを検討した。
- (オ) 平成27年1月19日、京都MMに3組織の代表が集まり、プロジェクトの総括をするとともに、「ナショナル・アーカイブ」構想にむけた課題の抽出を行った。

### 【会議及び視察メンバー】

#### <平成26年08月9日会議>

- ・ 渡邊朝子（京都国際マンガミュージアム）
- ・ 徳田なつき（京都国際マンガミュージアム／日本アспектコア株式会社）
- ・ 田中克彦（同上）
- ・ 木村恭規（同上）
- ・ 中谷よし美（同上）
- ・ 伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）

#### <平成26年10月20日会議>

- ・ 橋本博（熊本マンガミュージアムプロジェクト）
- ・ 表智之（北九州市漫画ミュージアム）
- ・ 土居安子（大阪府立国際児童文学館）
- ・ 吉村和真（京都精華大学）

#### <平成26年12月04・05日視察>

- ・ 橋本博（熊本マンガミュージアムプロジェクト）
- ・ 鈴木寛之（熊本マンガミュージアムプロジェクト）
- ・ 小川剛（崇城大学）、表智之（北九州市漫画ミュージアム）

---

<sup>3</sup> メディア芸術デジタルアーカイブ事業において推進されている、デジタルアーカイブの基盤となる作品所在情報等のデータベースシステム。マンガ分野においては、各所蔵館の単行本・雑誌・資料データがデータベース化されている。平成27年3月17日に公開された。

## 第1章 はじめに

- ・ 吉村和真（京都精華大学）
- ・ 田中克彦（京都国際マンガミュージアム／日本アスペクトコア株式会社）
- ・ 木村恭規（同上）
- ・ 池川佳宏（寿限無）

<平成 27 年 01 月 19 日会議>

- ・ 橋本博（熊本マンガミュージアムプロジェクト）
- ・ 表智之（北九州市漫画ミュージアム）
- ・ 田中千尋（同上）
- ・ 渡邊朝子（京都国際マンガミュージアム）
- ・ 田中克彦（京都国際マンガミュージアム／日本アスペクトコア株式会社）
- ・ 木村恭規（同上）
- ・ 伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）
- ・ 瀧上久史（京都国際マンガミュージアム／日本アスペクトコア株式会社）※インターネット回線を通じたビデオ参加

### 1.2.2. 実施体制および報告書執筆について

※ 【 】は、執筆を担当した章 記載がある章以外は京都 MM スタッフが執筆。

- 全体統括
  - ・ 吉村和真（京都精華大学）[全体統括]
- 京都国際マンガミュージアムにおける作業
  - ・ 伊藤遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）[全体統括補佐]【2-2、5】
  - ・ 渡邊朝子（京都国際マンガミュージアム）[京都 MM 資料整理統括]
  - ・ 田中克彦（京都国際マンガミュージアム／日本アスペクトコア株式会社）  
[熊本倉庫資料データ入力統括]【3（3-1を除く）】
  - ・ 木村恭規（同上）[システム管理]
- 北九州市漫画ミュージアムにおける作業
  - ・ 表智之（北九州漫画ミュージアム）[北九州 MM 資料整理統括]【2-1】
  - ・ 田中千尋（同上）古川清香（同上）
- 熊本マンガミュージアムプロジェクトにおける作業
  - ・ 橋本博（熊本マンガミュージアムプロジェクト）[熊本倉庫管理]【3-1】
  - ・ 瀧上久史（日本アスペクトコア株式会社）[熊本倉庫資料データ入力]
  - ・ 須藤祐加（日本アスペクトコア株式会社）[同上]

### 1.3. 本報告書の構成

基本的には、作業の流れにしたがって報告していく。まずは、第 2 章で、北九州 MM 及び京都 MM におけるマンガ本資料の所蔵状況を概観した上で、各館から熊本倉庫に資料が

## 第1章 はじめに

送られるまでの作業の実態について説明する。第3章で、そうして集まった書籍資料を、メディア芸術データベースに入力していく作業の流れを説明する。

第4章では、特に熊本倉庫におけるデータ入力作業について作業時間などを条件ごとに細かく分析し、最後の5章で、考察と課題を述べ、「ナショナル・アーカイブ」構想に向けての提言を行う。

また、以下については「別紙」としてまとめる。

- ・熊本倉庫での作業のための作業マニュアル・・・別紙1
- ・作業者へのヒアリングメモ・・・別紙2

### 第2章 北九州市漫画ミュージアム／京都国際マンガミュージアムから熊本倉庫への資料移管

#### 2.1. 北九州市漫画ミュージアム

##### 2.1.1. 実施前の状況

北九州 MM の開架マンガ本約 7 万冊は、重複が多い一方で、脱落も多く、必ずしも質の高いコレクションとは言いがたい。市場から消えやすいマンガ出版物の特性や、古書購入に煩雑な手続を要する市立施設の制約もあいまって、脱落の補充には苦慮していた。

そのため、寄贈の受入を積極的に行いたくあったが、個人からの寄贈受入は多くの重複資料を生む。資料の保管及び整理スペースの不足や、人手不足などから、ごく限定的な寄贈受入にとどめざるを得ないという状況である。

#### 付 | 北九州市漫画ミュージアム資料収蔵状況の詳細

北九州 MM は、開架運用するマンガ単行本を「図書資料」として約 7 万冊収蔵し、北九州市を中心とする地元ゆかりの作家・作品に関する資料（原画、雑誌、単行本、グッズなど）を「学芸資料」として約 2 万点収蔵している。

図書資料は、開館前の平成 22 年 11 月から平成 23 年 3 月 31 日までの約 5 か月間に受け入れた寄贈資料約 4 万点を核として構成したコレクションであるが、マンガ史上欠くべからざる重要な作品であるにもかかわらず、古書市場において希少で入手の叶わぬものなど、遺漏の多い不完全なコレクションと言わざるを得ない。

また、同館は市の直営によって運営しており、そのため古書の購入にあたっては、市費特有の制約（相見積もりの提出や、市内業者の優先など）も大きく、古書市場の動きに即応した小まめな収集が事実上できない状態にある。

そのため、コレクション充実の一助として、寄贈資料の受入を平成 26 年度から再開したが、図書資料の収蔵数は館の収納スペースをすでに越えており、寄贈受け入れにおいてほぼ不可避免的に発生する重複本を収納することはできない。したがって、館として必要とする作品をあらかじめ指定した上で寄贈の募集を行い、受け入れに先立って資料のリストを寄贈者が作成し提出することを要件とするなど、寄贈受け入れの間口を意図的に狭めた形での寄贈募集とならざるを得ない状況である。

同館のような規模でコレクションをすでに収蔵するマンガ施設が寄贈資料を受け入れる場合、寄贈者が寄贈を希望する資料全体のうちごく一部が館の欲する資料で、その他のほとんどは重複本となるのが通例である。またほとんどの寄贈希望者は、自分でリストを作成する時間や手間を捻出し得ない。したがって現在のような形式の寄贈募集では、多くの機会逸失が水面下で発生しているものと推察できる。

## 第2章 北九州市漫画ミュージアム／京都国際マンガミュージアムから熊本倉庫への資料移管

### 2.1.2. 実施内容

重複する資料や、当館の収集方針から外れるものなど、1,483冊のマンガ単行本を、同館の収蔵目録から除籍した上で段ボール箱25箱に詰め、熊本倉庫へ搬入し、クママンへの再寄贈を行った。

約3分の1(8箱)については未登録のためリストはないが、残り約3分の2(17箱)については、同館OPACから出力したリストデータを提供した。

また、利用頻度の低い4,000冊のマンガ単行本を、プラスチック製折り畳みコンテナ(以下、コンテナ)41箱に詰め、熊本倉庫へ搬入した。同館OPACからリストデータを出力し添付したが、資料がどの箱に入っているかを示す箱IDは搬出時には振っていない。熊本搬入後、資料を再整頓しつつ、箱IDを振り、今後の出納態勢を構築した。(=サテライト収蔵)

また、新規寄贈受け入れの積極的・全面的な実施に向けて、受入資料の仕分けや登録・装備、収納又は搬出などの司書業務を実施すべく、予算スキームを検討・協議したが、事務手続き上の問題から断念せざるを得なかった。

### 2.2. 京都国際マンガミュージアム

#### 2.2.1. 実施前の状況

京都国際漫画ミュージアムが所蔵している書籍資料は約 30 万点あり、このうち約 10 万点が、同館独自のデータベースである京都 MM-OPAC に未入力である。未入力分の資料の多くは、段ボール箱に積まれた状態で保管されているが、データ入力をしたとしても、収められる書棚がほとんどない、というのが現状である。

京都 MM の資料のほとんどは日々の寄贈によって成り立っている。開館当初は、申し出のあったものは全て受け入れていたが、瞬く間に収蔵スペースが埋まっていき、またかなりのもものが重複していることがわかってきたため、申し出があった時点ですでに所蔵していることがわかっているものについては、寄贈を断っている。ただ、未処理資料の中には、このやり方になる前の重複本が大量に含まれていると予測される。また、このやり方に移行した後でも、未処理本との重複調査ができないため、2 冊目以降のマンガ本を受け入れている可能性は高いと思われる。

#### 2.2.2. 実施内容

平成 26 年 11 月 3 日～28 日のうち、17 日間をかけて、2 人の図書スタッフが、京都 MM-OPAC へのデータ未入力資料から、今後使用頻度が低いと思われるマンガ単行本 5000 冊を仕分け、段ボールに詰めていった。その際、(同館全ての資料にそうしているように) ID を振ったバーコードシールを貼付、その ID の箱別リストを作成した。発送は、一気に行うのではなく、110 箱、7 回に分けて行った。

## 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

### 3.1. 熊本マンガミュージアムプロジェクト・熊本倉庫の整備について

熊本倉庫の運営母体である「NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト」は平成23年10月に設立された。これは、熊本市内で30年近く営業をしてきたマンガ古書店キララ文庫の店長である橋本博氏が収集してきた10万点にのぼるマンガコレクションを次世代に残すために結成されたNPOである。市民の手で熊本にマンガミュージアムを設立しようということで集まったマンガ研究者、マンガ家、行政職員、書店員、古書店員、マンガファンは平成26年、熊本市内にマンガを収納するため20万冊が収納できる倉庫を借り受けることになった。今後本が増えた場合にさらに拡大するスペースを確保するためこの場所を選定したものである。

この倉庫をかねてから熊本に関わりのあった京都精華大学の吉村和真氏が訪れた際に、その収蔵スペースの広さ、NPOメンバーのマンパワーの大きさ、賃料の安さに驚き、ここを全国のマンガ収蔵の拠点にできないかという提案があり、本プロジェクト参加に至った。

### 3.2. 書誌データ入力のためのシステム上の整備

北九州MM及び京都MMから熊本倉庫に集められた書籍資料の書誌データは将来的にメディア芸術データベースへの統合が可能となるよう、リストフォーマットの共通化を図り、11月29日～12月4日にかけて、同システムとの調整を行った。この作業に関しては、「メディア芸術デジタルアーカイブ事業」として同システムの作成に携わっている池川佳宏氏（株式会社 寿限無）の協力を得た。

入力前の整備としてまず、11月下旬～12月上旬にかけてメディア芸術データベース最終登録時からここまでの期間に京都MM-OPACに新規登録された差分データをメディア芸術へ新規登録した。（平成26年11月9日までの差分約2,000件を登録。）

なお、メディア芸術データベースに入力された京都MMの資料の書誌データは、後日、まとめて京都MM-OPACに同期させる。それが可能なのは、そもそもメディア芸術データベースのシステムや項目が、京都MM-OPACを参考に作られているからである。一方、北九州MM-OPACはシステム上同期できない。そのため、北九州MMから移送された資料は全て、あらかじめ北九州MM-OPACにて書誌データが入力されたものである。

#### **付 | メディア芸術データベースを採用する理由**

- メディア芸術データベースに蓄積されたマンガ資料の膨大な書誌データを活用することで、書誌データ新規登録を大幅に効率化でき、また、同データベースに慣れた京都スタッフが複数名居るため作業手順を想定・実施しやすいため。
- 各収蔵施設内の資料所蔵データが登録されていれば、検索後に画面上で正本・複本判定







### 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

#### 3.4. 資料の保管

データ入力された正本資料、複本資料を、それぞれナンバリングされたコンテナに収め、倉庫に移動、決められた保管場所に配置した。

(作業の詳細については、【別紙1】を参照)

##### 3.4.1. 箱移動と倉庫内作業について

当初登録作業は倉庫内を想定していたが、事前視察の結果倉庫内の温度が外気温の影響を受けるため倉庫内での作業は難しいと判断した。しかし作業室と倉庫の間には段差があり、台車での移動ができないため箱の移動にスタッフの労力が必要であった。

##### 3.4.2. 作業スペースから倉庫への箱移動

京都側で処理状況を把握する為、スプレッドシート上で作業室から倉庫内に箱を移動した際に、箱番号を入力した。

箱番号は、正本、複本 (ISBN 有)、複本 (ISBN 無) の3種類に分けた。(ISBNの有無で箱を別にしたのは、今後複本資料を管理する場合に備え、その際に発生する作業を効率的に行うためである。)

[共有スプレッドシート倉庫箱移動管理表]

箱番号		XK-0001～	KFA-0001～	KFN-0001～
日付		熊本処理正本倉庫移動	熊本処理複本倉庫移動 ISBN 有	熊本処理複本倉庫移動 ISBN 無
平成 26/11/28	金			
平成 26/11/29	土			
平成 26/11/30	日			
平成 26/12/01	月			
平成 26/12/02	火			
平成 26/12/03	水			
平成 26/12/04	木			
平成 26/12/05	金			
平成 26/12/06	土			
平成 26/12/07	日			
平成 26/12/08	月			
平成 26/12/09	火			
平成 26/12/10	水			
平成 26/12/11	木	XK-0001(63 冊)	KFA-0001-0003	
平成 26/12/12	金		KFA-0004-0008	

### 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

平成 26/12/13	土			
平成 26/12/14	日		KFA-0009-0012	KFN-0001-0002
平成 26/12/15	月			
平成 26/12/16	火			
平成 26/12/17	水			
平成 26/12/18	木	XK-0002(46 冊)	KFA-0013	KFN-0003-0006
平成 26/12/19	金	XK-0005(57 冊)	KFA-0014-0018	KFN-0007
平成 26/12/20	土			
平成 26/12/21	日		KFA-0019-0024	KFN-0008-0010
平成 26/12/22	月			
平成 26/12/23	火		KFA-0025-0028	KFN-0011
平成 26/12/24	水	XK-0006(60 冊)	KFA-0029-0032	
平成 26/12/25	木			
平成 26/12/26	金	XK-0003(60 冊)	KFA-0033-0034	KFN-0012
平成 26/12/27	土	XK-0004(61 冊)		KFN-0013-0014
平成 26/12/28	日	XK-0007(59 冊)	KFA-0035-0038	KFN-0015-0016
平成 26/12/29	月			
平成 26/12/30	火			
平成 26/12/31	水			
平成 27/01/01	木			
平成 27/01/02	金			
平成 27/01/03	土			
平成 27/01/04	日	XK-0009(57 冊)	KFA-0039	
平成 27/01/05	月			
平成 27/01/06	火			
平成 27/01/07	水			
平成 27/01/08	木			
平成 27/01/09	金	XK-0008(61 冊) XK-0010(55 冊) XK-0011(63 冊) XK-0013(38 冊)	KFA-0040-0042	
平成 27/01/10	土		KFA-0043-0047	KFN-0017-0018

### 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

#### 3.4.3. 倉庫内区画整理・箱配置と今後の課題

現在熊本倉庫内には、クママン、京都 MM、北九州 MM など複数の施設・組織の所蔵資料が保管されている。

もし複数の施設共有の倉庫として使用する場合、区画を切り分けて資料が混在しないように配置する事が重要になる。現在は床にテープを貼って明示しているが、今後計画的な区画整理が求められ、また保管方法においては段ボールの床置きではなく、配架棚の設置が望まれる。

また正本についてはカラーコンテナの側面に箱番号を貼付し、その順番に積み上げる方式をとっているが、この方式では高さ・重さの問題で作業者が限定されてしまい、今回も作業員 A（男性）が倉庫内の整理作業を主に担当し、作業員 B（女性）は PC 作業をメインという分担せざるを得なかった。今後、この取組を推進するためには、作業者が限定されないよう、作業方法において女性への配慮が不可欠である。



図 3-1 倉庫内の様子

#### 3.5. 遠隔による作業管理について

熊本倉庫作業の難しさの一つは、現地作業スタッフのいる熊本と、作業を統括・指示する京都スタッフとの距離の遠さにあった。

資料の登録時には判断に迷う場面が頻繁にあり、そういった際に、経験知を持った京都 MM のスタッフがタイムリーに助言できない事は作業の進捗やクオリティに大きな影響を与える。間違ったやり方に気づかずに作業が進行してしまい、後で時間をかけた修正作業が

### 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

必要なるリスクも高い。

今回はマニュアルを作成した上で、寿限無・池川氏の協力も得、現地でかなり詳しい事前のレクチャーを行った。しかしそれも限られた時間で説明できるのは作業の大筋だけであり、実際の作業の中でしか説明できないような事例も多数ある。また現物を実際に見ないと説明自体に時間がかかり作業スピードが大幅に落ちることも多い。

こうしたことを解消するためのコミュニケーションツールとして、下記のような手段を併用した。

- ・ Google スプレッドシート上での日報
- ・ Google チャット
- ・ G メール
- ・ スカイプでのビデオチャット
- ・ 携帯電話（緊急時用）

中でも最も有効だと思われたのは、スカイプでのビデオチャットであった。

文字でのやりとりでは作業の性格上説明が難しく、説明自体に時間がかかる。携帯電話は費用がかかる上、やはり言葉だけでは伝わりにくい。ビデオチャットで顔を見ながら、時には資料を画面に映しながらのやりとりが一番伝わりやすかった。

ただしビデオチャットには両者が PC の前にいる必要があり、京都側から熊本スタッフへの連絡は熊本スタッフが常時 PC 前にいるため可能であったが、熊本側から京都への連絡は京都スタッフは PC 前にいることがまれなため難しかった。

その意味で即座に連絡がとれる携帯電話、日々の連絡や依頼に適した共有スプレッドシート、複数のスタッフ間の確実な連絡に適したメールなど、複数のツールを併用するのが最も望ましい形であることがわかった。

今回は現地スタッフが本の扱いに慣れており、性格的にも極めて優れたスタッフであったため大きな問題は発生しなかったが、これはむしろ稀な例かもしれない。(それでも「OCR 読取」を「バーコード読取」と混同して一定期間作業が進むなど、多少の認識の齟齬はあった)。

現地スタッフ同士の間関係や、所蔵施設担当者との認識のずれ、事故があった際の緊急対応、セキュリティの問題など、サテライト収蔵には意思疎通の問題が極めて重要であると感じた。

### 第3章 熊本倉庫における書誌データ入力

[共有スプレッドシート日報（抜粋）]

	日付	スタッフ	連絡内容	スタッフ	返答内容
日報	平成 27/1/10	漵上	12:00～13:00、14:00～15:00 で倉庫作業。コンテナの移動に指を挟みそうになったことが作業上あったので、その改善。指一本分くらいの空間を、隣り合ったコンテナに設ける。13:00～14:00 で休憩。00095 の箱、00099 の半分を終了。全て複本。	田中	隙間ですか。小さなことですが、そういう小さなことの積み重ねが作業をより楽にしていけますよね。これからもそういう気づきがあったら教えて下さいね！
日報	平成 27/1/10	須藤	00094、00096、00097 の箱終了。00098 の箱が半分。13:00～14:00 に休憩を取りました。今日は3冊しか製本がありませんでした。		
依頼	平成 27/1/10	田中	>漵上さん、須藤さん 1/13(火)にカラコン 40 箱が到着する予定です。受け入れよろしくお願い致します。	漵上	承知致しました。

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

#### 4.1. 作業処理件数の統計

◆ 統計期間 平成26年12月05日～平成27年01月10日

##### 4.1.1. 作業処理件数の統計

一日当たりの処理件数は平均121件であった。

作業に慣れるに従い順調に処理件数は伸びているが、日によって件数にバラつきがあるのは、倉庫整理作業や京都スタッフとのスカイプ会議など、データ入力作業以外がメインとなった日もあるため、処理対象箱によって内容に違いがある（処理に時間がかかる資料がかたまっている）ため、などが理由として考えられる。

##### ◆ 作業員別作業件数

作業員 A 2419 件

作業員 B 2637 件

合計 5056 件

##### ◆ 一日当たり処理件数（データ入力作業以外も含む）

作業員 A：1日（2419÷23）：105件（23作業日）

作業員 B：1日（2637÷19）：138件（19作業日）

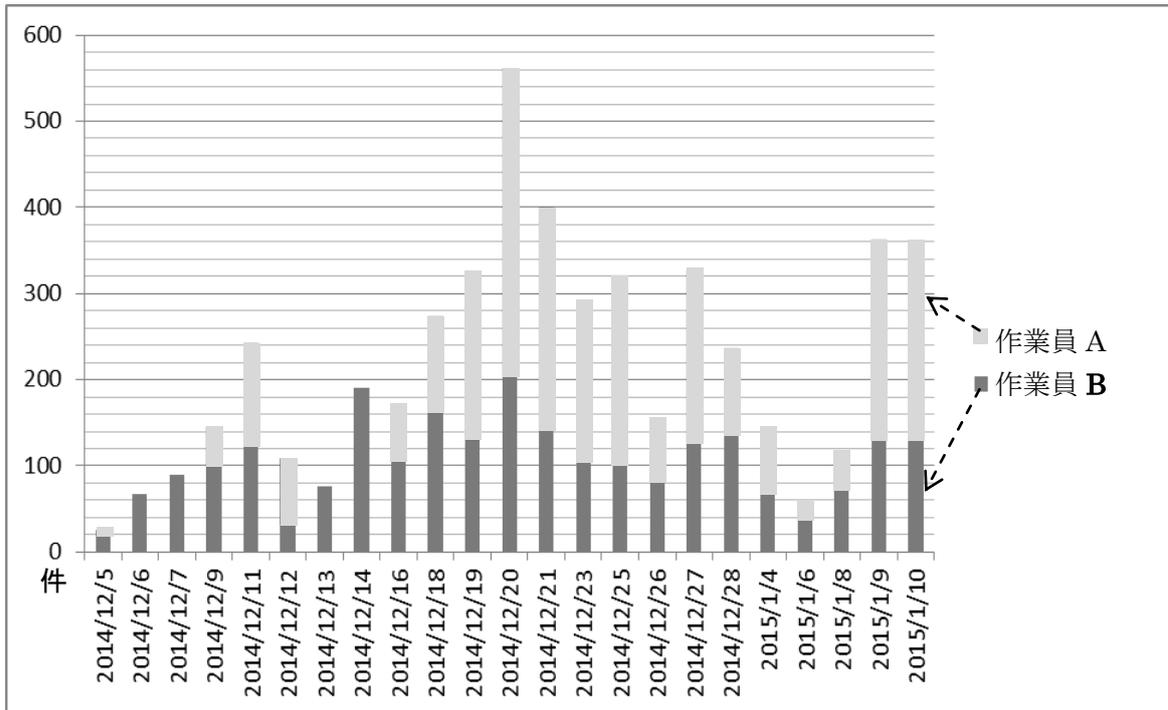
平均：1人121件

日付	A 処理件数	B 処理件数	合計	A 累計	B 累計	累計
平成 26/12/04			0			
平成 26/12/05	18	7	25	18	7	25
平成 26/12/06	67		67	85	7	92
平成 26/12/07	90		90	175	7	182
平成 26/12/08			0	175	7	182
平成 26/12/09	98	48	146	273	55	328
平成 26/12/10			0	273	55	328
平成 26/12/11	122	121	243	395	176	571
平成 26/12/12	32	77	109	427	253	680
平成 26/12/13	76		76	503	253	756
平成 26/12/14	190		190	693	253	946
平成 26/12/15			0	693	253	946

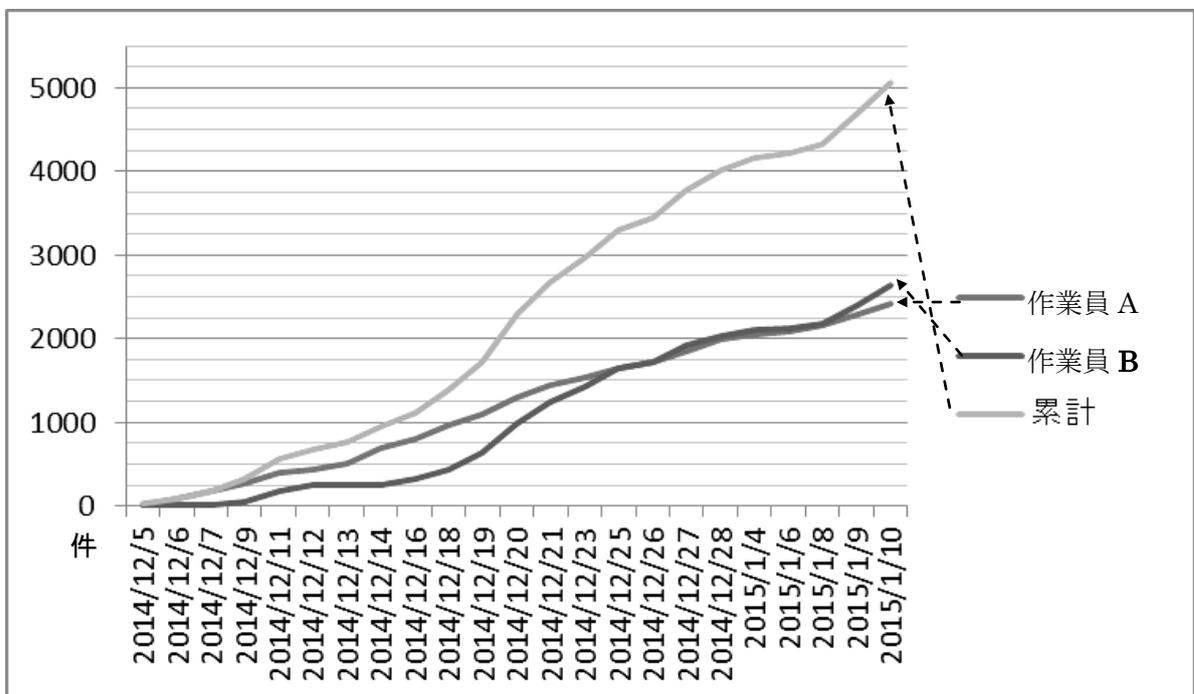
#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

平成 26/12/16	104	69	173	797	322	1119
平成 26/12/17			0	797	322	1119
平成 26/12/18	161	113	274	958	435	1393
平成 26/12/19	130	195	325	1088	630	1718
平成 26/12/20	206	356	562	1294	986	2280
平成 26/12/21	142	258	400	1436	1244	2680
平成 26/12/22			0	1436	1244	2680
平成 26/12/23	104	189	293	1540	1433	2973
平成 26/12/24			0	1540	1433	2973
平成 26/12/25	102	217	319	1642	1650	3292
平成 26/12/26	80	77	157	1722	1727	3449
平成 26/12/27	127	200	327	1849	1927	3776
平成 26/12/28	137	100	237	1986	2027	4013
平成 26/12/29			0	1986	2027	4013
平成 26/12/31			0	1986	2027	4013
平成 27/01/01			0	1986	2027	4013
平成 27/01/02			0	1986	2027	4013
平成 27/01/03			0	1986	2027	4013
平成 27/01/04	69	77	146	2055	2104	4159
平成 27/01/05			0	2055	2104	4159
平成 27/01/06	36	23	59	2091	2127	4218
平成 27/01/07			0	2091	2127	4218
平成 27/01/08	72	46	118	2163	2173	4336
平成 27/01/09	129	233	362	2292	2406	4698
平成 27/01/10	127	231	358	2419	2637	5056

#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告



[作業件数グラフ]



[作業件数累計グラフ]

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

### 4.1.2. データ入力作業時間／その他作業時間の割合

勤務時間について、データ入力作業の時間とそれ以外の作業（倉庫内の箱整理作業）とを別々に記録した結果の比率は約5：3であった。

作業員 A（男性）倉庫内の整理作業を主に担当し、作業員 B（女性）はデータ入力作業がメインの比率となっている。

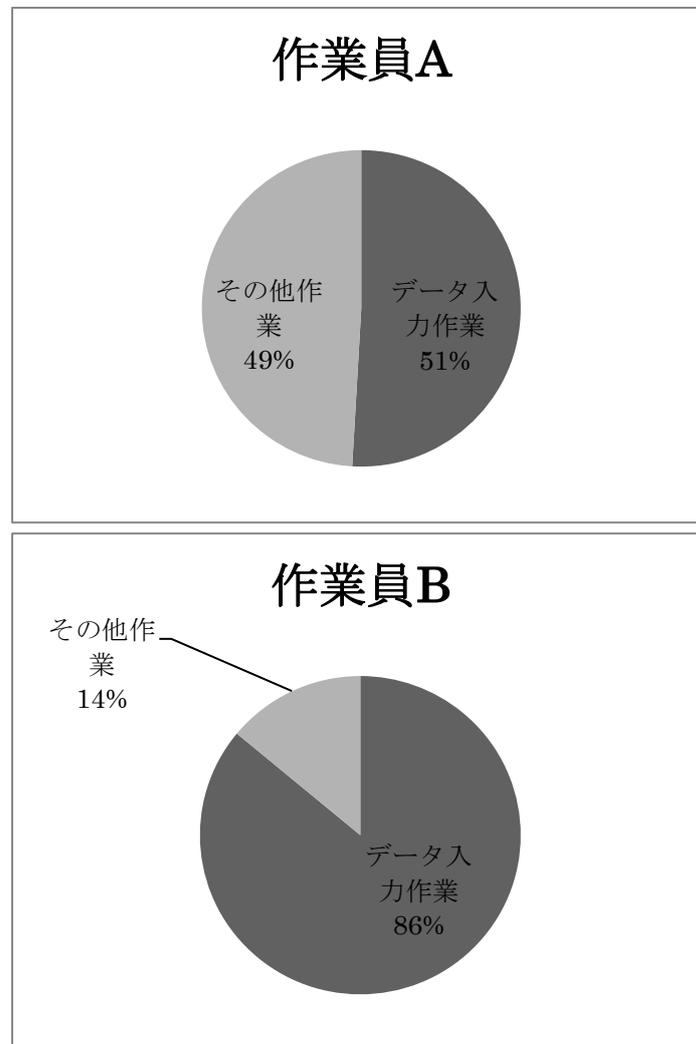
3割以上をデータ入力作業以外の整理作業が占めたことから、倉庫内の整理作業や倉庫への移動などの重要性が見て取れる結果になった。

・時間による作業内容別割合

作業員 A 84 時間：81 時間

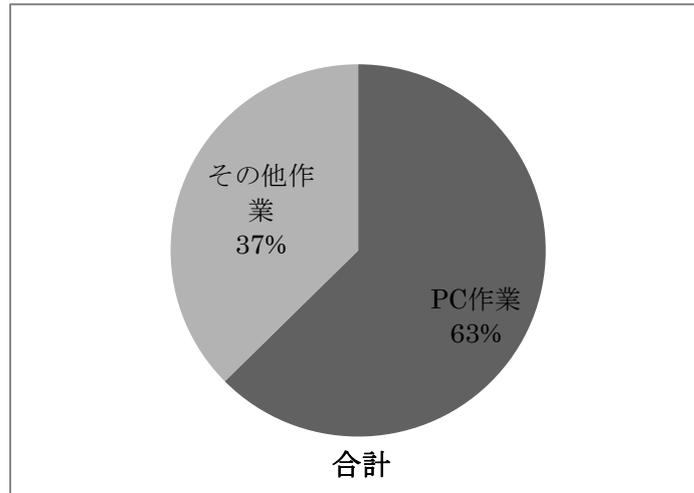
作業員 B 70.75 時間：11.5 時間

平均 154.75 時間：92.5 時間（約 5：3）



[作業内容別割合グラフ（時間）]

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告



### 4.1.3. 時間当たり処理件数

PC 上での作業だけに絞った場合、1 時間当たりの処理件数は平均 33 件、それだけに集中した場合は、2 人 7 時間勤務で 1 日の処理件数は 462 件であった。

作業員 A と B との差は個人差というより、倉庫作業を主に担った作業員 A と比べて、作業員 B は倉庫作業を挟まずに PC 作業に集中できた事によるものと思われる。

#### ◆ PC 作業時間

作業員 A 84 時間

作業員 B 70.75 時間

総 PC 作業時間 154.75 時間

作業員 A (2419÷84) : 29 件

作業員 B (2637÷109) : 37 件

平均 1 人 1 時間当たり 33 件

### 4.1.4. 資料の内容別の処理時間

今回の作業では、資料毎の内容によってどの程度の処理時間の違いが出るかを計測するため、1 件ごとにタイムウォッチで時間を測り資料分類と処理時間を入力した。

以下の 2 種類の分類を設定した。

#### (1) ISBN 類別

A 直接入力処理 (主に 1984 年以前に発行されたマンガ)

B OCR 入力処理 (主に 1985 年-1995 年に発行されたマンガ)

C BCD 入力処理 (主に 1996 年以降に発行されたマンガ)

この類別では、A が ISBN が無いもの、B が ISBN はあるがバーコードは無いもの、C

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

がバーコードのあるもの、として分類され、作業上では最初の検索の速度に影響する要素である。

今回の作業では OCR 読取り機能付きのバーコードリーダーを使用している為、B と C に関しては機械的に読取りが可能であり、A については「書名」や「著者名」からの手入力による検索を行うことになる。

### (2) 入力データ類別

- ① 文化庁書誌無-京都 MM 所蔵無（書誌情報、所蔵情報を入力）
- ② 文化庁書誌有-京都 MM 所蔵無（所蔵情報だけを入力）
- ③ 文化庁書誌有-京都 MM 所蔵有（京都 MM 複本として処理）

こちらの類別では、メディア芸術データベースと京都 MM-OPAC という 2 つのデータベース内にその資料と同じものが存在するかどうかによる分類である（正本・複本の判定もここで行われる）。

①はメディア芸術データベースのシステム内にデータの無い資料なので、書誌データの入力、京都 MM の所蔵データの入力を行い、②はメディア芸術データベースには書誌データがあり京都 MM には所蔵の無い資料なので所蔵データの入力のみを行い、③は京都 MM に所蔵のある資料なのでデータ入力を行わずに複本として処理する。

この 2 つの類別と、処理時間を 1 件毎に記録することにより、資料の内容によってどの程度の処理時間の差異が発生するかを計測する事を目的とする。

### [内容別処理時間（抜粋）]

No	日付	バーコード 番号	ISBN 類別	入力データ類別	所要時間 (分単位)
1	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
2	平成 26/12/05		C BCD 読取	③京都複本処理	1
3	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	1
4	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
5	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
6	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
7	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
8	平成 26/12/05		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
9	平成 26/12/05	19000001	C BCD 読取	②所蔵登録	3
10	平成 26/12/05	19000002	C BCD 読取	②所蔵登録	3
11	平成 26/12/05	19000003	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	15
12	平成 26/12/05	19000004	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	9
13	平成 26/12/05	19000005	A 直接入力	②所蔵登録	12
14	平成 26/12/05	19000006	A 直接入力	②所蔵登録	5

#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

15	平成 26/12/05	19000007	A 直接入力	②所蔵登録	6
16	平成 26/12/05	19000008	A 直接入力	②所蔵登録	6
17	平成 26/12/05	19000009	A 直接入力	②所蔵登録	5
18	平成 26/12/05	19000010	A 直接入力	②所蔵登録	4
19	平成 26/12/06	19000011	B OCR 読取	②所蔵登録	4
20	平成 26/12/06	19000012	B OCR 読取	②所蔵登録	4
21	平成 26/12/06	19000013	B OCR 読取	②所蔵登録	3
22	平成 26/12/06	19000014	B OCR 読取	②所蔵登録	3
23	平成 26/12/06	19000015	B OCR 読取	②所蔵登録	2
24	平成 26/12/06	19000016	B OCR 読取	②所蔵登録	4
25	平成 26/12/06	19000017	C BCD 読取	②所蔵登録	4
26	平成 26/12/06	19000018	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	8
27	平成 26/12/06	19000019	C BCD 読取	②所蔵登録	3
28	平成 26/12/06	19000020	C BCD 読取	②所蔵登録	3
29	平成 26/12/06	19000021	A 直接入力	②所蔵登録	3
30	平成 26/12/06	19000022	A 直接入力	②所蔵登録	3
31	平成 26/12/06	19000023	A 直接入力	②所蔵登録	3
32	平成 26/12/06	19000024	C BCD 読取	②所蔵登録	3
33	平成 26/12/06		C BCD 読取	③京都複本処理	2
34	平成 26/12/06	19000025	C BCD 読取	②所蔵登録	3
35	平成 26/12/06	19000026	C BCD 読取	②所蔵登録	3
36	平成 26/12/06	19000027	C BCD 読取	②所蔵登録	3
37	平成 26/12/06	19000028	C BCD 読取	②所蔵登録	3
38	平成 26/12/06	19000029	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
39	平成 26/12/06	19000030	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
40	平成 26/12/06		C BCD 読取	③京都複本処理	0.5
41	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
42	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	1
43	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	1
44	平成 26/12/06	19000031	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	15
45	平成 26/12/06	19000032	C BCD 読取	②所蔵登録	3
46	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
47	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
48	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
49	平成 26/12/06	19000033	C BCD 読取	②所蔵登録	3

#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

50	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	1
51	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	1
52	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
53	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	1
54	平成 26/12/06	19000034	C BCD 読取	②所蔵登録	4
55	平成 26/12/06	19000035	C BCD 読取	②所蔵登録	4
56	平成 26/12/06	19000036	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
57	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
58	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
59	平成 26/12/06	19000037	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
60	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
61	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
62	平成 26/12/06	19000038	C BCD 読取	②所蔵登録	3
63	平成 26/12/06	19000039	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
64	平成 26/12/06	19000040	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
65	平成 26/12/06	19000041	C BCD 読取	②所蔵登録	2
66	平成 26/12/06	19000042	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	6
67	平成 26/12/06	19000043	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	7
68	平成 26/12/06	19000044	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	4
69	平成 26/12/06	19000045	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	4
70	平成 26/12/06	19000046	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	3
71	平成 26/12/06		C BCD 読取	③京都複本処理	1
72	平成 26/12/06		C BCD 読取	③京都複本処理	0.5
73	平成 26/12/06	19000047	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	6.5
74	平成 26/12/06	19000048	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
75	平成 26/12/06	19000049	C BCD 読取	②所蔵登録	3
76	平成 26/12/06	19000050	C BCD 読取	①書誌・所蔵登録	2
77	平成 26/12/06	19000051	C BCD 読取	②所蔵登録	3
78	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
79	平成 26/12/06		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
80	平成 26/12/06	19000053	C BCD 読取	②所蔵登録	3
81	平成 26/12/06	19000054	C BCD 読取	②所蔵登録	2
82	平成 26/12/06		C BCD 読取	③京都複本処理	0.5
83	平成 26/12/06	19000055	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5
84	平成 26/12/06	19000056	C BCD 読取	②所蔵登録	2.5

#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

85	平成 26/12/06	19000057	A 直接入力	②所蔵登録	5
86	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
87	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
88	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
89	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
90	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
91	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
92	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
93	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
94	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
95	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
96	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
97	平成 26/12/07		B OCR 読取	③京都複本処理	0.5
98	平成 26/12/07		A 直接入力	③京都複本処理	0.5
99	平成 26/12/07		A 直接入力	③京都複本処理	0.5
100	平成 26/12/07		A 直接入力	③京都複本処理	0.5

#### 4.1.5. ISBN 類別 (A/B/C) データ統計

ISBN 表記による類別の件数と処理時間合計は下記のとおり。

##### A 直接入力

作業員 A 906 件 (1215.5 分)

作業員 B 91 件 (141.5 分)

合計 997 件 (1357 分)

##### B OCR 読取

作業員 A 943 件 (709.5 分)

作業員 B 1792 件 (997.5 分)

合計 2735 件 (1707 分)

##### C BCD 読取

作業員 A 570 件 (717.5 分)

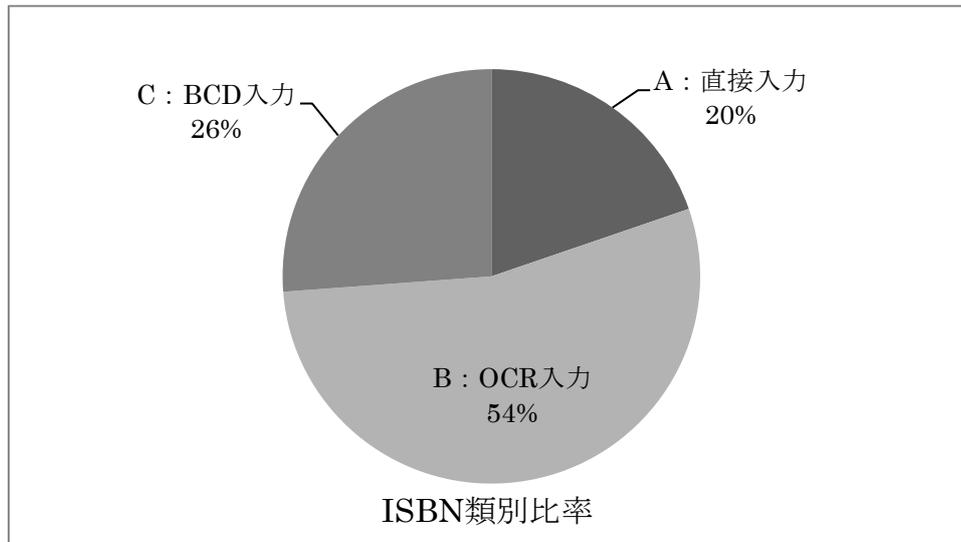
作業員 B 754 件 (513 分)

合計 1324 件 (1230.5 分)

#### ◆ ISBN 類別比率

A 997 (20%) / B 2735 (54%) / C 1324 (26%)

#### 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告



◆ 1件当たりの処理時間

A :  $1357 \text{ 分} \div 997 \text{ 件} = 1.4 \text{ 分/件}$

B :  $1707 \text{ 分} \div 2735 \text{ 件} = 0.6 \text{ 分/件}$

C :  $1230.5 \text{ 分} \div 1324 \text{ 件} = 1.1 \text{ 分/件}$

比率的には今回の作業対象にはBの1985年～1995年に発行された単行本が多いことがわかった。

処理時間的には大きな差は見られず、読み込み時間ではCに劣るはずのBが最も処理が早くなっているのはメディア芸術データベース内に既存の書誌が多かった(入力データ類別の影響)からだと思われる。

ISBNとOCRリーダーがあることで、資料を個別に判別する作業過程が自動化され作業スピードが上がる事に加え、打ち間違い、読み間違い等による資料の同定の精度にも大きく影響する。

よって「ISBNの有無」は今回のように大量のマンガ資料を扱う上で、「作業効率」と「作業精度」の両面で非常に重要なファクターになると言える。今後例えば倉庫内の複本を各館共有の資料として扱う場合などには、ISBNの有無で資料をあらかじめ分けておくことで、大幅な効率化が見込める。(そのため熊本作業で処理した複本は、ISBNの有無によって箱を分けた)

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

### 4.1.6. 入力データ類別 (①/②/③) データ統計

書誌・所蔵データ入力の有無による類別の件数と処理時間は下記のとおりである。

#### ①書誌・所蔵データ入力

作業員 A 98 件 (639.5 分)

作業員 B 137 件 (258.5 分)

合計 235 件 (898 分)

#### ②所蔵データのみ入力

作業員 A 304 件 (802.5 分)

作業員 B 187 件 (216.5 分)

合計 491 件 (1019 分)

#### ③複本処理

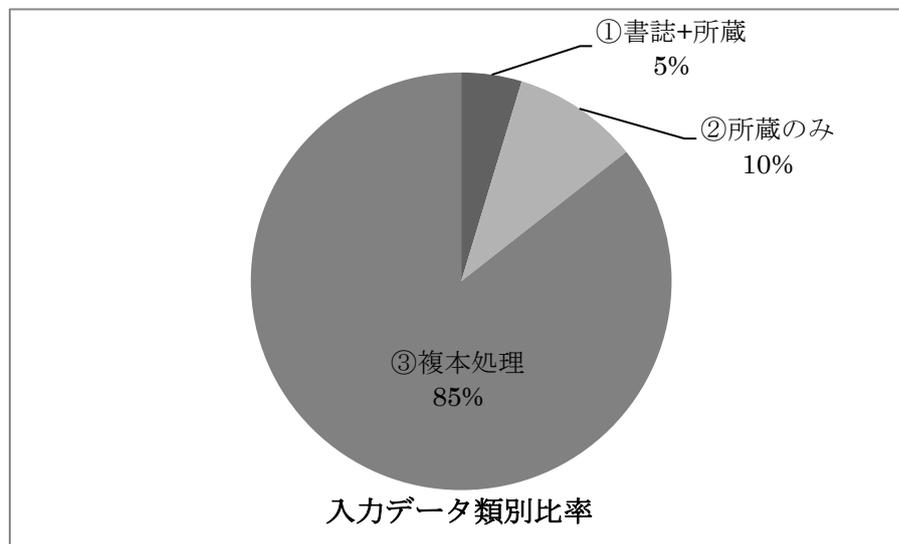
作業員 A 2017 件 (1200.5 分)

作業員 B 2313 件 (1177 分)

合計 4330 件 (2377.5 分)

#### ◆入力データ類別比率

①235 件 (4%) / ②491 件 (10%) / ③ 4330 件 (86%)



#### ◆ 1 件当たりの処理時間

①  $898 \text{ 分} \div 235 \text{ 件} = 3.8 \text{ 分/件}$

②  $1019 \text{ 分} \div 491 \text{ 件} = 2.1 \text{ 分/件}$

③  $2377.5 \text{ 分} \div 4330 \text{ 件} = 0.6 \text{ 分/件}$

## 第4章 熊本倉庫における書誌データ入力作業結果の報告

比率的には圧倒的に複本処理が多数を占めることがわかった。

また、処理時間もわかりやすい差が出ており、①>②>③の入力項目が多い順に処理時間がかかっていることがわかる

### 4.1.7. ISBN 類別と入力データ類別の組み合わせ処理時間

「4.1.5」及び「4.1.6」における「A=直接入力/B=OCR 読取/C=BCD 読取」及び「①=書誌・所蔵データ入力/②所蔵データのみ入力/③複本処理」の組み合わせによる処理時間は以下のとおり。

A-①	486.5 分 ÷ 101 件 = 4.8 分/件
A-②	373 分 ÷ 160 件 = 2.3 分/件
A-③	497.5 分 ÷ 736 件 = 0.7 分/件
B-①	153 分 ÷ 39 件 = 3.9 分/件
B-②	187.5 分 ÷ 86 件 = 2.2 分/件
B-③	1366.5 分 ÷ 2610 件 = 0.5 分/件
C-①	258.5 分 ÷ 95 件 = 2.7 分/件
C-②	458.5 分 ÷ 245 件 = 1.9 分/件
C-③	513.5 分 ÷ 984 件 = 0.5 分/件

2つの要素を合わせて1件当たりの処理時間を算出すると傾向が明らかになる。

ISBN 類別については A>B>C の順で、入力データ類別については①>②>③の順で明らかに処理時間がかかっている事が判る。

A>B>C は主に資料の発行年度を、①>②>③は（複数館の OPAC データを内蔵しているメディア芸術データベース内に同一の資料が無いことから判るように）資料の希少性をあらわしている。古い資料は同時に希少性が高いことが多い。

メディア芸術データベースを使用した今回の資料登録・処理を行う場合、対象となる資料の発行年度と希少性によって最大 10 倍程度の作業時間の差が発生する。今後作業時間を試算するには、この要素によって作業時間が大幅に増減することを考慮する必要がある。

### 第5章 成果と今後の課題

#### 5.1. 成果

本プロジェクトによって、プロジェクト自体の目的である、「資料現物の移動や管理、データベースの構築や共有など、資料保存・整理が抱える現時点での諸課題に試験的に取り組むとともに、近い将来取り組むべき問題点を浮き彫りにする」ということに加えて、以下のような成果も得ることができた。

- 1) 資料の再寄贈及びサテライト収蔵により、京都 MM や北九州 MM において今後の資料寄贈受入に必要な保管・作業スペースが確保できた。
- 2) サテライト収蔵した資料について、メディア芸術データベースに北九州 MM の所蔵データを入力したことは、今後、メディア芸術データベースと北九州 MM-OPAC との連携を図る上でのケーススタディとなった。
- 3) 寄贈受入資料の仕分けや登録・装備、収納又は搬出などの作業を、助成等を受けて外注するとすれば、どのような実務面での課題があるかを具体的に析出できた。

#### 5.2. 今後の課題

##### 5.2.1. データ入力に伴う問題点

本章では、平成 27 年 1 月 19 日に行われた総括会議における議論を中心に、本プロジェクトを今後どのように展開していくべきか、提言しておきたい。

今回のケーススタディでは、京都 MM 及び北九州 MM の書籍資料の一部を熊本倉庫に移管し、それらをメディア芸術データベースに入力、一連の作業に伴うコスト及び問題点等を洗い出した。

両館が移管した資料は(データ入力の過程で複本だと判明しクママンに寄贈したものを除けば)、各館が所蔵する正本である。言い換えれば、熊本倉庫とは、両館にとっての「サテライト所蔵庫」ということができる。

そうであるならば、熊本倉庫に移された資料は、それぞれの館において、それぞれの OPAC において管理できる状態にしておく必要がある。「3-2」で述べたように、熊本倉庫に集まった資料は、まずはメディア芸術データベースに入力することが合理的であると思われるが、その場合、北九州 MM-OPAC のように、メディア芸術データベースと同期できないというのは、大きな問題のひとつである。今回は結局、北九州 MM において、同館の OPAC に入力した資料を熊本倉庫に送り、その上で、あらためてメディア芸術データベースに入力するという、いわば二重の作業が行われる形となった。もっとも、京都 MM-OPAC がメディア芸術データベースと同期できるシステムであったことは、もしかしたら特殊なケースなのかもしれない。今後、メディア芸術データベースの活用度を向上させるためにはこの問題は看過できないだろう。

## 第5章 成果と今後の課題

### 5.2.2. <活用>システム構築のための課題

「サテライト所蔵庫」は、データベースで管理できるようになるだけでは意味がない。これらの資料を管理し、「本館」からの要請があれば、出納し、郵送するといった<活用>のためのシステムを確立させる必要がある。

熊本倉庫の管理の在り方に関しては、(1) この倉庫を使っている複数の施設に共通の管理者を置き、共通のルールをもって管理・出納・郵送を行う、(2) それぞれの施設が、それぞれの管理者を置いて、それぞれのルールで管理・出納・郵送を行う、という2つのパターンが考えられるが、施設間の連携体制構築という観点から考えると(2)のシステムの構築を目指すべきだろう、というのが、関係者会議での結論であった。<活用>の在り方が施設によって全く異なってくる可能性も考えると、「共通のルール」作りも簡単ではないが、「ナショナル・アーカイブ」を実現のためには、次のステップとして取り組むべきことのひとつだろう。

また、この倉庫の資料を“塩漬け”するのではなく、出納されることが前提とされるのであれば、書庫としてのインフラを整備していくことも重要である。現状、データ入力された資料は、“住所”が振られたカラーコンテナボックスに収めて、積み上げているだけだが、このやり方の困難については、「3.4.3 倉庫内区画整理・箱配置」で述べたとおりである。やはり、書棚が設置されることが望ましい。

### 5.2.3. 予算に関する課題

今後、京都 MM や北九州 MM などの既存所蔵館が寄贈の受入を積極的・全面的に行っていく上では、重複分の再寄贈をクママンが全面的に受け入れられる状況にあるかが鍵になるだろう。また、資料の受入・作業・保管場所としての熊本倉庫を維持できるかどうか、今後のコレクション充実にとって極めて重要であると言える。

熊本倉庫にサテライト収蔵した北九州 MM の資料については、北九州 MM で開催される企画展において必要とする資料を出納し活用する可能性が見込まれ、したがって年5回程の出納と輸送が必要になると考えられる。頻度としてさして高くはないが、熊本倉庫に必要な資料の出納と簡単な梱包や発送を代行できる人員が常駐していることが望ましい。

今後寄贈の受入を積極的・全面的に行おうとする上では、作業人員の不足も大きな足かせのひとつであり、そういった資料の出納と簡単な梱包や発送作業の外注とその費用の金銭的な助成が望まれる。しかし、市の直営施設である所蔵館の場合、助成金の受け入れには多大なる実務的な制約がとれない現実的ではない。今後、自治体がマンガ文化施設を設置する例が増えていくことが予想される中で、円滑に支援するためのスキーム作りが必要である。

## **第5章 成果と今後の課題**

### **5.3. おわりに**

マンガ本（単行本+雑誌）は、年間に1万種類発行されていると言われている。ポピュラーカルチャーを扱うことの困難はこの膨大さにあるが、今回のケーススタディによって、この困難さを打破するためのひとつの細い道筋をみることができた。この道筋は、ひとつの施設だけで考えていてもみえてこなかったはずで、その意味では、この取り組みは連携事業として継続して行っていく意義があるだろう。

発行:森ビル株式会社

平成 27 年 3 月

本報告書は、文化庁の委託業務として、森ビル株式会社が実施した平成26年度「メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業」の成果を取りまとめたものです。  
本報告書の内容の全部又は一部については、私的使用又は引用等著作権法上認められた行為として、適宜の方法により出所を明示することにより、引用・転載複製を行うことができます。